序論 政治経済学の対象と領域について
第1章 この科学の名称と意味について
第2章 政治経済学との内容と配列について
第3章 2つの階級、および固有の政治経済学へのこれらについての関連への実定法の予備的
な区分
第1部 「政治経済学ブローバーについて」
第1編 人口について
第1章 人間の自然史の一項目として考察された人口について

第2章 政治経済学の一項目として考察された人口について
第1節 両性間の結合を規制する政治的諸制度によって影響される人口について
（1） 内縁関係と比較した結婚
（2） 一夫多妻制と比較した一夫一婦制
第2節 両性の結合に関連した生活様式の状態によって影響される人口について
第3節 人々によって享受される生存手段に対する人口の依存
（1） 十分な家族の支援に関して抱かれている考え方についての結婚および人口の依存
（2） 人口に関して考察される農業と製造業について
Ⅰ 農業と関連した人口について
1） 農場保有の種類
2） 農場の負担
3） 農場の規模
4） エンクロージャー
5） 所有の規模
Ⅱ 製造業によって影響される人口（と農業）について
1） 工場労働における子供の雇用について、その利益と不利益
2） 労働の代替物としての機械について、その利益と不利益
3) 人口密度は国の範囲、国民的栄業への一定の指標に比例するか

付録 特定の場合に人口を確定するために用いられてきた手段について

第2編 国富について
第1章 生産的労働と不生産的労働について
(1) 特に、エコノミストの体系について
(2) 労働をより効果的にする諸事情について
  1) 分業について
  2) 労働の代替物としての機械の使用について

第2章 流通媒介物としての貨幣について
(1) 貨幣の起源を用途について
(2) 実質価格と名目価格について
(3) 貴金属の豊富もしくは希少性が価格に及ぼす影響について
(4) 価値基準としての貨幣について
(5) 利子について

第1編と第2編の付録
付録1 人口に関してビントからの拡枠
付録2 議会地金報告書に関する覚書

[第2編 国富について（続き）]
第3章 交易について
第1節 交易の自由について
(1) 国内商業と勤労に対する抑制について
(2) さまざまな国民の商業取り引きの制限について

第2節 穀物貿易について
(1) 国内の穀物取り引きについて
(2) 国内の消費のために穀物輸入商人によって行われる貿易について
(3) 外国の消費のために穀物輸入商人によって行われる貿易について
(4) 将来の輸出のために穀物の運送商人または商人による貿易について
（5）穀物貿易に関する多様な考察

第3節 貨幣商業の法の規制への従属について
第4節 土地商業の法の規制への従属について

第4章 租税について
第1節 租税一般について——序論
第2節 土地に対する租税について
（1）土地の地代に対する租税について
   1）固定的条件によるもの
   2）変動地代によるもの
（2）地代にではなく土地生産物に比例する租税について
（3）家屋の賃料に対する租税について
（4）利潤もしくはストックから生じる収入に対する租税について
   1）利潤一般に対する租税について
   2）特定の雇用の利潤に対する租税について
（5）結論

第3編 貧民について——彼らの保護

第1章 ブリテン救貧法の歴史的概観
（1）イングランドの救貧法について
（2）スコットランドの救貧法について

第2章 貧民救済のための補助手段について
（1）慈善救貧院について
（2）ベネフィット・クラブあるいはフレンドリー・ソサイエティーについて
（3）貧民自身の悪い習慣から生じる限りの貧民の困窮について

第4編 下層階級の教育について

第2部 政治学プロパーあるいは政府の理論について^{15}

第1章 政府の単一の諸形態について

第2章 混合政府について

このように、シュチュアートの『政治経済学講義』は、目次構成から見るだけでも多岐にわたることが知られる。それは、政治経済学についてのシュチュアートの知識が相当なものであったことを示している。ウィンチは、「スミス前後の英語とフランス語の文献でシュチュアートが使いこなし文献の知識とは目を覚ますものがある」（Winch 1983, p. 50, 訳、44頁、Cf. Brown 1992, pp. 656-657）と述べている。実際に、哲学と経済学についてのシュチュアートの著書の数は、スミスよりもずっと多いので知られる（Crawford 2004, p. 56）。シュチュアートによる政治経済学の定義は、「政治社会の幸福と改善」を目的とするあらゆる理論を含み、したがって「富」と「人口」という用語で述べられる従属的な問題や機能的問題だけではなかった。シュチュアートは、スミスの社会的効用の視点を共有し、現実の生活への実際に適用可能な研究に注意を払った（Brown 2000, pp. 141-142）。ウィンチは、シュチュアートの『政治経済学講義』の特色について次のように評している。シュチュアートは、政治経済学講義において、「スミスの理論のどこが限定を必要とするかを示し、最新の経験的研究に関心を向けさせ、現代的問題への応用を例示すること」が「自分の仕事」であると考えていた。「その細目のおもなものは、人口、国富、貧民対策そして下層の者の教育であった。このリストは……実践志向を示唆している」（Winch 1983, p. 50, 訳、44頁）。このように、シュチュアートの政治経済学講義は、その講義それ自体が経済理論にとどまらず、特に当時の主要な問題であった貧困や教育といった広範なテーマを扱うことによって、実践的な役割を担っていたといえよう。

こうした幅広いテーマを扱うシュチュアートの経済学には、それに似た特徴を持つスミス『国富論』からの影響が窺える。実際に、シュチュアートは、1793年にエディンバラの王立協会において講演した『アダム・スミスの生涯と著作』において、スミス『国富論』を賛成している。また、シュチュアートとスミスとの直接的な交流があったことは、人物的にもスミスを身近に感じ取っていたのではないかと推察される。そもそも、シュチュアートは、スミスのグラスゴウ時代の同僚であり、スミスと親交があったことで知られる。シュチュアートは、1784年に、自らが主催したパーティーにおいて、当時グラスゴウ大学の学長であったエドマンド・パークと、ローダーデイル、ならびにアダム・スミスらと一緒に食事をしている（Stewart 1784, pp. 17-19）。一般に、スミスの後継者として論じられる。パークとローダーデイルとシュチュアートが一緒に会食している光景は、16）『講義』第2部「適切な政治学あるいは政府の理論について」の第1章と第2章の各節の目次については省略した。
それを想像しただけでも大変興味深いものであるが、むしろここで重要なことは次の点である。それは、スチュアートが、この時の会食について記した「ローダーデイル卿への訪問の備忘録」 (1784年)の中で、「パークは、多くの有益なコメントを加えながら、これまでの経済学の著作物全てのうちで、スミスの『国富論』が素晴らしいものであると語った」と記していることである (Stewart 1784, p. 21)。このことから、遅くとも1784年には、スチュアートは、スミスの『国富論』が重要な著作であることを認識していたことがわかる。1793年の「アダム・スミスの生涯と著作」を講演する以前から、スミスとともに過ごしたこうした社交場の中で、スチュアートは、スミスの『国富論』に畏敬の念を抱いていたといえる。

それでは、幅広い主題を扱ったスチュアートの政治経済学講義は、その当時、どのように受け止められたのであろうか。スコットランド出身の学生だけでなくアメリカや大陸ヨーロッパの学生もスチュアートの講義を聴講したが、彼の講義は学生たちを魅了し、政治経済学に対する彼らの熱気は教室にみなぎっていたといわれている (Spencer 1992, p. 1163)。毎年一教室に平均40人の国内外の学生が熱心にスチュアートの講義に耳を傾けた (Veitch 1854-1860, p. lii)。講義を履修した学生たちの中には、後に「エディンバラ・レヴュー」を創刊したフランシス・ジェフリ、ヘンリー・ブルーム、フランシス・ホーナー、シドニ・スミスのほか、ヘンリー・コウバーンやマクヴィ・ネイビアなどがいた。シュンペーターは、スチュアートの「講義や著作」がスミスの『国富論』を世に広めるのに大きな役割を果たしたことを指摘している (Schumpeter 1914, S.54n, 訳, 124-125頁)。「スチュアートの伝記」を著し、スチュアートの人物についてもっとも精通していたジョン・ウィッチが述べているように、スチュアートの『政治経済学講義』は、スミス『国富論』の単なる解説本ともみなされるべきではない17)。ウィッチによれば、『政治経済学講義』の内容は、個々に見れば重要な見解が論じられている箇所もあれば、スミスの教義に対するスチュアート独自の批判ならびに修正がなされている箇所もある (Veitch 1854-1860, p. xlix)。ウィッチによれば、スチュアートが、スコットランドだけでなくイングランドでも「政治的自由」や「経済的自由」について大きな思想的影響を与ええた点で、同時代人で彼を凌ぐ人物はいなかったとされる (Veitch 1854-1860, pp. xiii-xiv)。その事実は、スチュアートの政治経済学講義を実際に聴講した多数の学生の証言からも窺い知ることができる。19世紀前半から半ばのブリテンの学術分野で卓越した功績を残した、フランシス・ホーナー、ヘンリー・ブルーム、ジェイムズ・マッキントッシュ、ならびにヘンリー・コウバーンは、スチュアートの講義のもと優雅さや高貴な雰囲気を賞賛していた (Macintyre 2003, pp. 158-160, 171)。ウィッチは、「『一般的作法と精神』との刺激剤」としてスチュアートの政治経済学講義の意義をもっていたと論じている (Winch 1983, pp. 49-52, 訳。)

17) フォンタナも「スチュアートの『講義』はスミスの教義の単純な説明ではなく」と論じている (Fontana 1985, pp. 46-47)。
デュガルド・スチュアートの経済学研究とその意義（荒井） 93

44-46頁）。しかしこの一方で、スチュアートの政治経済学講義の受講生の中には、同講義には、術学的で他の著作物からの引用が多いなど、スチュアート独自の主張や見解が少ないという批判もあった。たしかに、『講義』は、決して全てではないが、他の人々の著作からの引用に基づいて議論が進められ、それらに対するスチュアート自身の積極的な主張や見解が必ずしも示されないまま、次の論点へと移っていくという箇所も散見される。だが、『講義』を詳細に検討することにより、スチュアート独自の経済学の特徴が示されることから、こうした批判は的を射ていないと考える。スチュアートの『講義』には、道德哲学を基礎にしながらも、貧困や教育などの政策論を重視した独自の経済学の特徴を有していることが見られるからである（荒井 2011, 荒井 2014a）。

さらに、スチュアートの政治経済学講義の後の時代に与えた影響についても過越しえないものがある。例えば、トマス・ロバート・マルサスは、1805年にイングランドのハートフォード州、ヘイリベリの東インド・カレッジにおいて、「近代史および経済学」を講義したが、マルサスがこの講義において意識していたのは、エディンバラで既に行われていたスチュアートの政治経済学講義であったといわれている。さらに、ケンブリッジ大学の初代の経済学者である、ジョージ・ブラムや、オックスフォード・ノエティクス、ならびに、エディンバラ・レヴァーらに影響を与えた事実は、特筆に値する。すなわち、スチュアートの講義は、19世紀初頭に限らずそれ以後においても長い間影響を与え続けるのであった。

スチュアートの政治経済学講義が広範な影響を与えた事実は、彼がその当時有力な経済学者であったことを示している。このことは、19世紀初頭においてさえ、スミスの『国富論』が多くの人々に必ずしも十分に認知されていなかった中で、経済学の存在を世に広める重要な意味をもっていた。スミス『国富論』の売り上げ部数を年代順に調べたタイヒグレーバーは、もちろんスミスの『国富論』はそれなりの部数が売られたものの、「1805年まで公共の財産になっていなかった」と分析している（Teichgraeber 2000, p. 101. Cf. Skinner 2003, pp. 200-202）。この点で、スミス『国富論』がまだまだ市民権を確立していない中で、スチュアートの政治経済学講義が、スミス『国富論』を単に解釈しただけでなく、その修正や独自の意見を示したことは重要である。また、19世紀初頭において、政治経済学という用語それ自体が人々に浸透していないだけでなく、まだ学としての経済学が確立されていない中で、経済学のものの考え方を学生たちに提供したことも、スチュアートの経済学の意義をもつものということができる。

ここで注意しなければならないのは、講義の与える影響を決して軽んじて見ることができないということである。シャーによれば、18世紀のエディンバラ大学の道德哲学の教授職は、ファーガソンから後任のスチュアートにかけてウィッグと密接な関係があった（Sher 1990, pp. 112-126）。この当時の大学の講義は、政治と深く結びついていただけでなく、権威と威厳に満ち、きわめて公共的なものであると同時に社会的影響力をもっていた。こうした大学史の脈脈上、スチュアートの講義を考慮に入れるならば、彼の『政治経済学講義』が、彼の著作物のうちでいかに重